

# 拓魂

静岡県学友会  
大会報  
拓学

相談役 渡邊吉夫  
支部長 石田光雄

## 「柔道の鬼」木村政彦先生の 生誕百周年に思う

学部六十六期 安齊悦雄

木村政彦先生が逝去(平成五年四月享年七十五歳)されてから早いもので二十五年となる。そして昨年九月、木村先生(大正六年九月生)の生誕百周年となった。

平成二十三年、「木村政彦はなぜ力道山を殺さなかったのか」(増田俊也著)が十八年間の取材を経て発刊され、それがベストセラーとなり、先生に再び光が当てられて話題を呼んだ。これに伴い、著者から何回かの取材があった。

先生の経歴等については先生の著書や「柔道部百年史・拓魂の軌跡」(平成十四年発刊)で周知のとおりであるが、その他のことについてはほとんど存じ上げない。

取材にあたって「先生との関わりの中でご自身から聞いた話や、私が実

際に見聞した範囲内のことでなら。」と取材に応じてきた。

発刊後、間もなく著書が送られてきて一通り読ませてもらったが、私の知る範疇との相違点が幾つかあり、多少の違和感があったが、長期に渡りよくここまで取材されたなど驚いている。

### 【先生との出会い】

昭和三十八年、東京オリンピック開催の前年、鎌倉学園高三年時、愛媛県松山市でのインターハイから戻り部活の休みをもらって在宅中、高校柔道部の師、齋藤次郎先生から「拓大の木村政彦先生が来校されている。すぐ道場へ来るように。」との電話が入り、急いで学校へ向かった。

道場には、木村先生の他、当時学生の高橋久男、花島紀久雄、藤野輝也、岩釣兼生の各氏が待機されており、岩釣氏は道衣に着替えていた。

あいさつもそこそこに急いで道衣に着替え、早速岩釣氏との乱取りとなった。いわゆるセレクションである。立技、

寝技と一通りの稽古が終了すると、木村先生から「お父さんにお会いしたい。」と言われ木村先生ご一行を実家へ案内することになった。途中「お父さんは、お酒を飲むか。」と聞かれ、父は晩酌していたことから「ハイ。」と答えると、近くの酒屋で日本酒三本を調達された。父との面談が一通り済むと我が家で宴会が始まった。そこで私の拓大進学が決まってしまったようだ。

### 【猪熊功への指導対応】

翌日、拓大の夏季合宿(於防衛大)への参加を求められ、そこへこの年の全日本選手権者である猪熊功氏と師匠の渡辺利一郎先生が来られた。渡辺先生は過去に木村先生とともにプロ柔道へ参画していた方で、当時、横須賀の汐入で柔道場を開設。私が高校三年間通った道場で、猪熊氏は憧れの兄弟子である。

渡辺先生が、旧知の間柄か「キーちゃん(木村先生への呼び名)、うちの熊に一本背負いを指導してくれないか。」と依頼したところ、なんと木村先生は「五分や十分で教える技はない。」との断りに啞然とした。

木村先生のことをあまり存じ上げなかったので、全日本チャンピオンの猪

熊先生への指導を平然と断るとは、この人はどんな人なんだろうと思っただが、初めて出会った時の印象であった。

当時、木村先生四十五歳、拓大へ師範として復帰されてから三年目のことである。

以後、学生時代、コーチ・監督時代等で、合宿・遠征・スカウト活動あるいは先生への指導依頼の同伴など、十数年間「鬼の柔道」木村政彦先生と寝食を共にするような関わりを持つことになるとは想像できなかった。

### 【生誕地での村おこしと「木村ロック」】

先生の生誕地である熊本の川尻町では、郷土の偉人、木村政彦先生の生誕百周年にあたり、元市長らの音頭で「村おこし」の一環として、その偉業を称える様々な行事が行われたそう。

その中の一つに、「木村ロック」なる球磨焼酎が発売された。

「木村ロック」とは、先生の得意技の一つで、関節技の「腕緘」である。

エリオ・グレーシーとの一戦で、勝負を決した技として、世界の格闘家の間では知らない者はいないと言われており、敗れたエリオが敬意を込めて名付けたものと聞いている。

先生は普段は冗舌で、我々に対してよく冗談を言われていたが、過去のこと、プロレス時代のこと、特に力道山戦やその他の経歴については、ほとんど話されなかった。もちろん、こちらからも聞こうともしなかったし、できなかった。

ただ、エリオ戦については一、二度聞いたことがある。技が決まった瞬間「グキツ、グキツ」となったところで折れたのが確認できたが「参った」をしない。「いいか、いいか」と声を掛けるも「参った」しない。仕方なく更にダメ押しすると、骨が砕けるような「グジュ」とした音がした。セコンドからの制止でやっと終わったが、「エリオは、どんなことがあっても、最後まで『参った』をしない。生死を掛ける覚悟で戦う。こんな者は、見たことがない。二度とやりたくない。」と、その根性を認めながら言われていた。

先生が逝去されてから五、六年経った頃、日本での「グレイシー柔術」の人気に伴い、エリオ一家が来日した際、先生の消息を知るため、息子達と一緒に講道館を訪ねてきたことがあった。

対応した資料館長の村田直樹氏から「木村先生はすでに逝去された」と伝えました。相当ショックを受けてい

るようです。先生の弟子として何かありますか。」との電話があった。余計なことは言わない方がいいかなと迷ったが、先生から聞いていたエリオへの気持ちや伝えてもらったところ、「彼は真の武士だ。試合の後、血を流している私に『大丈夫か?』と氣遣ってくれた。」と涙を流しながら喜んだそう

で、伝えてよかったなと思っている。その球磨焼酎の「木村ロック」が好評で、発売当初なかなか手に入らないと聞いていたので、地元OBへ頼んで取り寄せ、県内の柔道部OBや何人かのOBと分かち合った。その焼酎のラベルには先生の顔写真があり、なか見られているようで、緊張しながら味わうこととなり、改めて先生との当時の関わり、特に印象に残っている出来事について回想してみた。

【木村式トレーニング】

第一に思い浮かぶのは、なんとと言っても当時の拓大の稽古やトレーニングであろう。これらは全て木村先生が実践されてきたもので、技術面はもとより、いつながりがあっても対応できる強靱な体力・精神力、そして持久力の強化を主眼に置いていると思われる。その内容は異質で過酷なもので、主にレギュラー陣に課せられた。

主なものを列挙すると、

- 「締技は参ったなし」落ちるまで
- 「立木への打込」電柱にロープを巻き、一本背負い・釣込腰・大外刈等の打込み
- 「泥上げ」約百キロ位の石や泥を詰込んだ約一メートル四方の木箱を抱えての階段昇降
- 「腕立て」すり上げ方式で千回、終わるまで約一時間
- 「巻藁突」正拳・裏拳・手刀・肘打等空手部かと錯覚する
- 「うさぎ跳び」膝を一回一回伸ばして高く跳ぶ方式
- 「夜間の呼集（起床）」○時頃が多い。打込やトレーニング
- 「厳寒時の水泳」薄氷の張ったプールや池への飛込や海での寒中水泳
- 「恐怖の中休み」合宿中日の休日だが、休息どころか平素の倍となる
- ・ 飯盒炊飯予定が、明石宿舎から六甲山までのランニングと頂上でトレーニング
- ・ ソフトボール予定が、熊本城から金峰山までのランニングと頂上でトレーニング
- ・ 観光予定が、市内宿舎から日本平までのランニングと久能山階段でトレーニング
- ・ 朝から夕方まで、昼食抜きの終日

松栄石油(株)

〒438-0086 沼津市松長1069-1  
電話 055-966-8830

学部65期 植松 義己

足立会計事務所

〒410-0822 沼津市下香貫牛臥3018-5  
電話 055-931-6391

大学院16期 足立 吉松

稽古

等々だが、いつやるのか、いつ終わるのか、先生の胸一つ。一旦始まると翌朝までが度々あり、毎日が緊張の連続。同期が半減する中、よく無事にやってこられたなど今でも感心している。

【優勝前夜の祝勝会】

こうした稽古の甲斐あつてか、昭和四〇年、東京学生・全日本学生大会で悲願の初優勝を遂げた。東京学生の前夜のことである。試合に備え早めに就寝していると、零時近くに先生から起床が掛かった。起床そのものは驚くことではなかったが、明日の試合を控え、また朝までトレーニングかと思つていたら、近くの焼肉店にレギュラー全員が集められ、ビールを注文、先生の「優勝おめでとう」の発声で、「ありがとうございます」と応え、乾杯をさせられてしまった。

翌日の大会では、決勝で日大を三一二で破り、念願の初優勝を果たすことになるが、優勝が決まった瞬間、うれいと言うより、前夜のこともあり全員がホツとしたというのを今でも鮮明に覚えている。

東京を制する者は全国を制すると言われていたごとく、全国大会では、

決勝戦で宿敵の明大に一〇で勝利し初優勝した。これは我々に暗示を掛けたのか、それとも心眼で優勝が見えていたか。この出来事が不思議で今でも語り草となっている。

木村先生とは、高校時代に拓大への勧誘時以来十数年に及ぶことになったが、この間、稽古の厳しさばかりでなく、先生と一緒ならではの貴重な経験も多々させてもらっている。それが私の誇りであり財産でもある。

今回は紙面の都合上ほんの一部となったが、拓大の生んだ偉人、木村政彦先生との関わりの中でのエピソードを、後輩に語り継いでいかなければと思っている。

生誕百周年を期に、今年こそ、ご無沙汰している熊本市大慈祥寺で眠る先生の墓参を実現し、改めて、ご冥福と深甚なる感謝を申し上げたいと思います。

カボチャ食堂のまちづくり

学部七十八期 加藤育朗

私が住む磐田市見付は、旧東海道の宿場町、古くは遠江国府、守護所の所在地として、東西文化の交流点東

海道の要衝として栄えてきたまちである。

平成二十五年、創刊四十年の歴史を持つ地元の地域情報誌・NEOぱんぶきん編集長の小林佳弘氏を講師として、眠っている歴史文化の遺産を『まちづくり』に生かして行こうと、『カボチャ食堂』という名の勉強会が始まった。

毎月第一火曜日の夜に開かれるこの勉強会は、『食堂』という名が示す通り、一回千円の参加費で、鍋料理とオードブルが提供される。

講座の後、食べながら飲みながら、寛いだ雰囲気の中で、地元の歴史や文化を語り合うのだが、具体的な「まちづくり・まちおこし」の妙案が簡単に浮かんでくる筈はない。

ここから生み出される一番の宝は、ここで出会った人と人との繋がりではないかと思う。既存の活動にも新たな参加者が加わり、別な視点からの見直しが始まりつつあるのも一つの成り果であろう。

【『カボチャ食堂』名前の由来】

明治初期に見付三本松で菓子商を営む前島傳之助氏が、尾張方面より在来種のカボチャを導入した。このカボチャの品質がとても良かったので、栽培は拡大され、昭和に入る頃には、東は沼津から西は豊橋に至るまで出

海野製作所有限公司

代表取締役 海野 一樹 (学部72期)

〒421-2124 静岡市葵区足久保口組1-1

TEL 054-296-2665  
FAX 054-296-3043

株式会社 ヒロキ

〒421-1215 静岡市葵区羽鳥1-10-5

TEL (054)277-2365  
FAX (054)278-5824

代表取締役 井出博敏 (学部67期)



荷され、地域を代表する特産品『見付かぼちゃ』に育っていった。

見付地区では、安土桃山時代よりカボチャが栽培されていたという記録がある。(「しずおかの在来作物」(稲垣栄洋静大教授)) 謂わばこれが第一復活期と言えるのだろう。

戦中から戦後にかけて食糧難の時代を、見付かぼちゃは地域住民の空腹を満たした。「毎日食べた時期もあった。他に食べる物がなかった。」と、元菓草公園職員の寺田氏は終戦当時を振り返って語る。

やがて西洋カボチャの普及により在来種は衰退し、見付かぼちゃも市場から姿を消した。

『カボチャ食堂』の名は、その見付かぼちゃに由来している。講師の小林氏が発行する情報誌「NEOぱんぷきん」の名称にも通じるものがある。

見付かぼちゃの栽培が産業として華やかな頃に思いを馳せ、再び賑う郷土を作っていくという思いが込められているのかもしれない。

因みに、見付かぼちゃは今再び復活の道を歩み始めている。

十数年前、地元企業を定年退職した鈴木文雄氏が、史料を頼りに愛知県で見付かぼちゃに極めて近い種類の種を探し当て栽培に成功。今、試行錯誤の中、改良を重ねている。私も今年六月から特非法人見付かぼちゃ保

存会の理事として、この活動に参加している。

種子法が廃止され、種苗法が改正された今日、その土地の気候風土に根差した在来種の復活は重要な意味を持つ。農林水産業は他の産業と同じ土俵で競争に曝されるべきではない。産業である以前に社会基盤(インフラ)である。食料と国土は安全保障の原点であるという認識が必要だ。

【見付大久保氏と明治維新】

カボチャ食堂の会場となるのは、見付宿場通りのほぼ中央、現存する日本最古の洋風小学校建築で知られる国特別史跡・旧見付学校の西隣に位置する大久保邸である。

大久保家は、明治初期まで淡海国玉神社(遠江国総社)の神主を務めた家系で、初代は徳川十六神将のひとり、大久保忠佐(ただすけ・元亀元(一五七〇)年就任、後に初代沼津藩主・講談等で知られる天下のご意見番大久保彦左衛門の兄)である。

遠州国学盛んなりし幕末期、十三代神主・忠尚(ただなお)は、自宅敷地内に私塾や私設図書館『磐田文庫』(国特別史跡)を開設し、地元住民への教育に尽力した。その頃の門弟は二百人を超えていたという。

慶応四年一月、鳥羽伏見の戦いで幕府軍敗北第一報が大久保邸にも

たらされた。偶々居合わせた津毛利神社の桑原真清など他の神官と諮り、その後戊辰戦争に従軍する『遠州報国隊』結成への動きへと繋がる。

見付から約半里南には、遠江、駿河、三河、甲斐四ヶ国の天領を支配下に置く中泉代官所があり、討幕の動向に対する監視の目は厳しかっただろう。大久保邸には天井裏に隠し部屋があり、報国隊結成の密談にも使われたという。カボチャ食堂開催日や、催事の時の公開日に、私も何度か拝見したことがある。

二月二十一日、遠州各地から神職を中心に、総勢三百六名を集めて『遠州報国隊』が結成され、忠尚は留守部隊として、資金や物資の調達などの役を担った。

忠尚の息子・初太郎(後に春野/変名・堀江提一郎)は出征部八十七名の中心的な役割を担って従軍し、同年六月二日に江戸城西の丸大広間において挙行された戊辰戦争官軍戦没者の招魂祭では祭主を務めた。

十一月の報国隊解散後、初太郎は、軍務官書記、兵部大録と、着々と出世の道を歩み始めていた。大村益次郎に嘆願し、招魂社設立にも尽力した。

翌明治二年六月二十九日、九段の地に東京招魂社(現靖国神社、明治十二年改称)が設立された。招魂社での最初の招魂祭の祭主は、父忠尚

遠江企画

とおとうみきかく

代表 加藤 育朗 (学部78期)

〒438-0086 磐田市見付4852番地

☎090-1629-5151 Fax020-4669-5757

E-Mail: info@totoumi.com

http://totoumi.com/



株式会社 静岡産業社

本社 静岡市葵区流通センター 4-7

電話 054-263-2138

FAX 054-263-2136

http://www.sizsan.co.jp/

が務めている。

初太郎は、明治三年から五年間フランスに留学(変名・堀江提一郎)。帰国後は、大久保春野として陸軍に出仕。明治二十三年には戸山学校長、翌二十四年に士官学校長、日露戦争には第六師団長・中将として奉天会戦に軍功をたてる。その後、薩長以外では初の陸軍大将として韓国併合時の韓国駐劄軍司令官(併合後朝鮮駐劄軍)など、要職を歴任した。

明治になって大久保家は、春野の妹繁子が養子・忠利を迎え、淡海国玉神社第十四代神官を継ぐ。

明治五年学制発布を受け、忠利は、領地の一部を寄進して、学校建設に寄与する。現在の国特別史跡・旧見付学校である。

### 【講師持ち回りの新体制へ】

平成二十八年四月、講師を務めていた小林氏が体調不良により急遽辞任したため、講師は持ち回りという事になった。会員はそれぞれ専門の分野で活躍してきた逸材揃いなので、講師役には事欠かない。

考古学を専門とする大島氏は、磐田原台地に集積する旧石器時代の遺跡や、見付から出土した中世最大規模の墳墓群について、県食糧事務所に勤めていた今村氏は、食をテーマにした町おこしの実例を具体的に伝えて

くれた。郷土史家の岡部氏からは、終戦時国運を左右したとされる、磐田市の鮫島海岸に不時着した緑十字機の話や、三方原合戦に繋がる緒戦、一言坂の戦いの真相、江戸時代の大名茶人として知られる松平不昧(松江藩主)と酒井宗雅(姫路藩主)が見付宿で出会い、茶会を催した話など、興味深い講座が目白押しであった。

二回目の講師の順番が私に回ってきたのは今年の夏の事。拓大とも縁の深い『西郷隆盛』を題材に選んだ。西郷隆治先輩(二十一期柔道部・静岡県出身の元理事長狩野敏先輩と同期)、西郷隆秀先輩(二十七期応援団・元理事長)と、御令孫のお二人は我々の先輩である。

### 【西郷隆盛と征韓論】

通史では、西郷隆盛が征韓論を主張したとされているが、実際には礼節を以て交渉に当たろうとしたのであって、謂わば『礼節外交論』である。西郷が征韓論を主張したことは公式には一度もない。ただ、強硬な征韓論者であった板垣退助と交わした書簡が、その根拠という説がある。「西郷が一人で交渉に行き、若し殺されれば派兵の口実が出来る云々」というものがある。しかしそれは、西郷説を支持する様説得するための工作であったとみるべきだろう。

西郷人気を背景とした征韓論は、日清日露の戦役に向けて、国論を後押しして行く。実はこれこそ「西郷征韓論説」を流布し定着させた目的だったのかもしれない。

ところで、征韓論争を主軸とし、六百人もの大量の辞職者を出した『明治六年政変』の舞台裏では、何が起っていたのだろうか。

明治四年十二月、岩倉使節団が日本を発つて間もない頃、琉球王朝へ年貢を納めた帰途遭難した宮古島島民が、台湾南部で惨殺される事件(牡丹社事件)が発生。台湾は南方経路の重要拠点であり、放置しておけば琉球における日本の主権が問われる重大問題である。動き方一つ間違えれば、事為す前に清国の反発や第三国の介入を招きかねない。

政府は、巧みな外交交渉の一方、征韓論争に内外の関心を集中させつつ、台湾出兵の準備を進め、明治七年五月、西郷従道率いる遠征部隊は、台湾南部に侵攻し、約一カ月で鎮圧した。清国や英国から激しい反発に遭ったが、大久保利通の粘り強い交渉と、英仏の協力も得て、日本の出兵は義挙である事を清国が認め、琉球の日本帰属が国際的に承認される事となった。

歴史家の落合莞爾氏は、征韓論争を取って過熱化させた意図は、台湾

出兵隠しであると断じている。

また、鹿兒島出身の歴史家・窪田志一氏は、西郷が自らの遺韓に強く拘った理由については、西郷の私的事情があったとしている。

窪田説では、西郷は真方衆(まがたんし・島津家の隠密集団)棟梁・岩屋梓梁(いわやしんりょう)の末裔で、岩屋梓梁の事績は、国内では過去の権力(豊臣・徳川)により抹殺された為、朝鮮にその痕跡を求めようというものだ。《紙面の都合上、詳細割愛》

明治四年十一月十二日に日本を発つた岩倉使節団(明治六年九月十三日帰朝)の留守中は、西郷が実質の首相の役割を果たしていた。

岩倉使節団の目的は、大きく三つ挙げられている。①条約締結国へ国書提出。②不平等条約改正の予備交渉。③欧米事情視察。(Wikipediaより) 留守政府は、制度改革と主要な人事変更を行わない約束であったが、改革や人事は矢継ぎ早に実施されていた。実はそれが岩倉使節団のもう一つの目的であったと落合莞爾氏は語る。新政府樹立後の大久保利通は、保守専制化傾向にあり、数々の改革が停滞していた。大久保を連れ出して止まっていた改革を進めると言うのが、隠された目的だったと言う。

主な目的として掲げられている

『条約改正予備交渉』については、法整備が全く進んでいない状況では、土俵にも乗らないことは自明の理であり、全権大使・岩倉具視は当然承知の上の事。在米中に大久保利通と伊藤博文を、条約改正国書委任状取得のために一時帰国させているが、これは、条約改正交渉に真実味を持たせるためと、在米某要人と岩倉との極秘会談を大久保に悟らせないためだろう。

明治維新はまだまだ謎が多い。現代人の知識は、明治政府と御用史家が隠蔽・捏造・歪曲を重ね、その上に小説家が書いた物語を真実と錯覚。更に甚だしきは、娯楽番組大河ドラマをそのまま史実と誤解している人も少なくない。一つの情報を鵜呑みにするのはなく、多角的に検証する姿勢が何事においても大切である。

【カボチャ食堂と今後の見付宿】

カボチャ食堂会場の床の間から、大久保春野の胸像が、いつも我々を見守っている。明治維新に関わる歴史の舞台となった大久保邸を会場に学ぶことが出来る意義を、今後も重く受け止めていきたい。

最初の講師であった小林氏は、今は健康も回復し、明治時代に報徳運動の拠点となった見付の報徳社を新たな会場とし、歴史講座を始めており、

私を含め、何人かのカボチャ食堂の会員も参加している。

『カボチャ食堂のまちづくり』の基本は、まず地域の歴史文化を学ぶ事から始まる。そして学ぶ中から、人との繋がりが生まれ、新しい発見がある。

磐田市見付には国の無形民俗文化財に指定されている『見付天神裸祭』の様な伝統的な祭から、東海道四百年祭を契機に始められた『遠州大名行列・舞車』や『見付宿たのしい文化展』など近年に作られた新しい行事も多く、会員の中には、元々関わりを持つ人から、カボチャ食堂を契機に新たに加わっていく人もいる。

まちづくりは、何か新しい事を作り出すだけではなく、既存の活動を見直し、強化し、味付けをし直して行く事も重要な事ではないだろうか。夫々の地域でまちづくりに携わる皆さんのご参考になれば幸いです。

【参考文献】

- ・「再考見付大久保邸」(見付宿を考える会)
- ・「日仏交流黎明期の解明」(明治大坂兵學寮 佛國留學生史研究会)
- ・「伝統野菜見付かぼちゃの歴史(吉岡正明)」
- ・「NEOばんぶきん」(小林佳弘)
- ・「水戸っぼ田〇〇(八十四期・深川隆成拓兄)」
- ・「日本の聖者西郷隆盛と天皇制社会主義」(他落合秘史シリーズ(落合莞爾))
- ・「西郷征韓論は無かった」(窪田志一)



校歌

宮原民平 作詞  
永井建子 作曲

- 一、右手に文化の炬をかげ  
扶桑の岸に声あげて  
闇は消えよと呼ぶは誰ぞ  
人は醒めよと呼ぶは誰ぞ  
嗚呼輝ける雄渾の  
姿ぞ我の精神なる
- 二、雲は焰の色に飛ぶ  
南国水はたぎるとも  
春光永久にへだてたる  
北地に氷とぎすとも  
仰いで星を見るところ  
拓かてやまじ我が行手
- 三、人種の色と地の境  
我が立つ前に差別なし  
膏雨ひとしく湿さは  
磽确やがて花咲かむ  
使命は崇し青年の  
力あふるゝ海の外